

日本語のルーツを探ろう

36期生

I テーマ設定の理由

私達は、何ごとにもよらず、物事の起源を知りたいと願うものである。現在、私達が当然の様に使いこなしている日本語も、その起源の問題については、多くの研究者の膨大なエネルギーを呑みこみながらも今だにはっきりしない有様である。ある人は、日本語は、朝鮮半島を渡り玄海の波濤をこえて北方からやって来たと考え、ある人は、琉球列島を伝い、黒潮に乗って南方からやって来たと考え、またある人は、洪積世(旧石器)の太古から、日本で使われ、独自に発達して来たと考えたというこの謎とロマンに満ちた問題を、できる限り深く追求していきたいと思ったのである。

II 研究方法

共同研究は、幾人かで一緒に同テーマについて研究するだけに、内容の深い、範囲の広い研究ができる反面、まとめる若しくは共に行動する必要が生じた時の不便さというのは言わずと知れたことである。そこで私達は、今までにない新しい試みとして、「共同研究の中の個人研究」を尊重していく為に、二人が全く別の観点から日本語のルーツを探っていくことにしたのである。

▶第1部◀

日本語のルーツを調べて行くにあたり、形成の核をなした「古極東アジア語」と「ビルマ系江南語」の二つの大きな言語の流れについて研究し、日本語のルーツの全般的な様子をつかむ。
(担当・浦坂)

▶第2部◀

第一部の内容の中でも、インドを中心として栄えた、「ドラヴィダ語」にスポットを当て、日本語に対する影響力の最も強いと考えられる所似を探る。

(担当・粉川)

III 研究結果

▶第1部◀

(1) 日本語の起源の問題はなぜ解けないのか。

今日まで様々な学説が多くの研究者から発表されたにもかかわらず、どれも一長一短ではっきりしない理由に、次の2つが主に挙げられる。

理由Ⅰ 系統論が日本語についても当然成り立つと考えられていたから

○系統論

インド・ヨーロッパ言語の研究において成功を修めたモデル。

主に文化的優位性を持つ言語について成立することが多く、現在のスペイン語・フランス語・イタリア語・ポルトガル語・ルーマニア語などは、いずれも古代ローマのラテン語から分裂し、独自に発達したものだと考えられている。

○流入論

他の言語を自ら取り入れる形のモデル。

日本語の起源において成り立つのは、多くの言語が注ぎ込む形のこの流入論であると考えられる。

理由Ⅱ 必然の一致と偶然の一致とを客観的に弁別する方法が、厳密には提出されていなかったから

例 「手」英語 独語
hand [hænd] Hand [hant]

★ 同系関係に基く必然の一致

「そう」英語 日本語
SO [sou] SO [sô:]

★ 偶然の一致

○言語学者コーワン (Cowan) の議論

従来の比較言語学の方法によって得られた結果は、実際は、客観的な証明ではなく、主観的な印象の上に成り立っているのである。このことは十分に認識されているとはいえない。私達が必要としている方法は、ごくわずかな、しかし具体的な、言語学的な証拠を量的に測定しうるものでなければならない。そして測定の結果が、言語間の関連について、十分な証明力をもちうるかどうか、できる限り人間の主観をはなれて決定しうるものでなければならない。統計学的にいえば、これは2つの言語の間に認められる一致の数が、偶然によるものかどうかの確率を計算することによってのみ可能となる。

(2) 日本語のルーツを探ろう

以上の様なことをふまえて、まず他言語との比較の対象となる日本語の文法上、音韻上の特徴から、どの言語が日本語に近いかを探っていく。

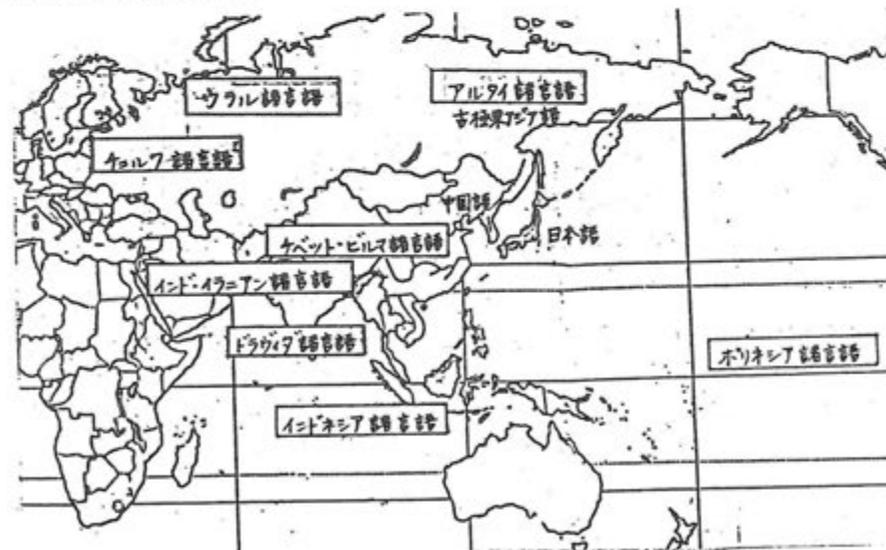
<どの言語が日本語に近いか>

	日本語		アイヌ語		朝鮮語		アルタイ諸語			ビルマ語		中国語		オーストロアジア諸語		ヨーロッパ諸語			○印の数				
	上	東	首	機	サ	中	現	フ	フ	フ	キ	レ	北	ア	サ	マ	イ	タ		ベ	フ	英	ド
	古	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方	方
語頭にr音が立たない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
語頭に濁音が立たない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
語頭に子音群が立たない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
rとlとの音韻的対立がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
濁音と清音の音韻的対立がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子音群がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
重母音がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
単語はだいたい2音節からなる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
単語は原則として母音でおわる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
語類は「主語-目的語-動詞」である	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「てにをは」にあたるものがある	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
形容詞は名詞のまえにおかれる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○印の数	12	12	12	12	12	9	11	8	10	10	9	7	8	10	8	6	8	7	7	4	6	3	3
○印の数のグループ別平均値	12	12	10	8.8	8	8	7.5	6	4.5	3.5	3	188											

・○印は、内容にやや問題があるもの。

次に、以上の様なことから日本語の起源全般に関する1つの説を述べていくがこれが全く正しいとは言いきれない。ただ、これまで発表された様々な学説の上に成り立っているため、今までの中でも最も斬新な説だと言えよう。

<日本語に近い言語の分布>



第1の層「古極東アジア語」

今から6・7千年以上前、環中国語の一環をなし中国の東北部の朝鮮語の語順に関係ある「古極東アジア語」が、日本・アイヌ・朝鮮の共通の祖語だと考えられる。これは、かなり昔、アルタイ諸語からわかれたと考えられ、主に日本語の文法や音韻の特徴に多くの影響を与えた。

第2の層「インドネシア諸言語」

今から6・7千年程前、縄文期に第2の言語の波がインドネシアの方面から日本へよせて来た。ポリネシア諸語とわかれサンスクリット語を受けついでと考えられるこの「インドネシア諸言語」は、その後、古極東アジア語と対立し、主に南九州や四国に分布し、日本語の基礎的語彙を作り上げていった。

第3の層「ビルマ系江南語」

紀元前2・3世紀、弥生時代が始まる頃、稲作などと共に第3の言語の波として、中国の江南（長江の南）の地方からビルマ系の言語がよせて来た。「ビルマ系江南語」と言われるこの言語は文化的優位性が強く、主に身体語や名詞、代名詞、その他植物関係の言語が形成されていった。後に 第2部 で述べるドラヴィダ語とはこの系列の言語である。

第4の層「中国語」

紀元前後から、2千年にわたって、日本列島の上に第4の言語の波として、漢民族の「中国語」がよせて来た。今日の日本語の、文化的語彙のほとんどは、中国語からの借用語である。

(3) 総 括

以上が私の調べた限りでの最も確かな説であるが、これを読まれた方はどの様な想いを抱かれたでしょうか。生まれた瞬間からあたり前の様に慣れ親しみ、使ってきた日本語が世界中の言語の集結であると言われてもピンとこないのではないだろうか。日本語は一般にはまるで孤立した言語かのように考えられていた時代があったが、実は英語にも劣らない素晴らしい「世界語」だったのである。私は、これらのことを知り得ただけでも今回の自由研究の目的を果たせたのではないかと思う。これからは是非とも自国語に誇りを持ち、更に数知れない日本語の迷にチャレンジしていきたいと思うし、またこれを読まれた方にもこれを機会に日本語に興味を持ってもらいたいと強く願っている。最後になったが、この研究結果は紙面の都合上、大部分をカットしてしまったので少しわかりにくい部分があることを深くお詫びして▶第2部◀へバトンタッチしたいと思う。

▶第2部◀

(1) ドラヴィダ民族の起源

ドラヴィダ民族は、いったいどこから来たのであろうか。インドに最も昔住んでいたのはネグリト（小柄な黒人という意味）とよばれる人々である。アフリカから陸伝いにインドへやってきたらしい彼らは、現在はアンダマン諸国など、2・3か所に点在して分布するだけである。その次にインドへ移住したのは、原オーストラロイド型の人々で、現在はセロイン島（スリランカ）や中・東部インドに分布している。その後にインドにはいつてきたのは、地中海人種に属するドラヴィダ民族である。地中海人種というのは、イタリア、スペイン、北アフリカ、中東など地中海周辺の地域に見出される長頭、低身長の人種である。ドラヴィダ民族を構成する地中海人は顔つきがよく似ている上に、民族学的にも思想や文化などの面で地中海人種につながりを持つことが指摘されており、これらのことから見て、ドラヴィダ民族は地中海地域からインドへ移住してきたと考えられている。次にインドに登場するのが、好戦性と移住指向性を合わせもった半遊牧民のアーリア人である。彼らは紀元前1500年頃、西北からパンジャブ地方に侵入して先住民を征服、定住した。このアーリア人が移住してくるより前には、ドラヴィダ民族が地中海地方から移住して北西インドでインダス文明（紀元前2500～1500年頃）を繰り広げた。

そして、アーリア人による襲撃で、この文明が破壊されたのではないかと推測される。

(2) 現在のドラヴィダ諸語

ドラヴィダ諸語というのは、主にインド亜大陸とスリランカ北部で話される言語であるが、このほかに、インド亜大陸中部・北部、パキスタンのバルチスタン地方にも言語的飛び地として分布している。これらの言語の話し手は現在、約1億1千万人で、インドでは全人口の約25%を占めているから、4人にひとりが、これらの言語を話す計算になる。ドラヴィダ諸語は、現在少なくとも22存在することがわかっているが、そのうち文化的・人口的にもっとも主要な言語の4つを下の表にまとめた。

ドラヴィダ諸語	使用人口	分布と特徴
タミル語	3,100万人	タミルナドゥ州・スリランカに分布
マラーラム語	1,700万人	ケララ州に分布、タミル語から分岐
カンナダ語	1,700万人	カルナタカ州に分布
テルグ語	3,800万人	アンドラ・プラデシュ州に分布

(3) 日本民族とドラヴィダ民族の比較

●狩猟・採集に関して……

狩猟と採集、漁による生活を営んでいたのは日本と同じである。狩は主に男が行い、草摘みや果実採集は女の仕事であった。また薬も知っていた。狩猟では弓矢を使い、鹿、ウサギ、狼、馬、山羊・うずら・タカ・カラスなどを捕まえた。

川や海では釣針・矢・やす・もりなどを使って、サバ・ハヤ・アユ・ワニ・カキ・ハマグリ・海そうなどを得た。

●衣食住に関して……

<食>原始ドラヴィダ民族が食用に採集した陸上の植物には、ねぎ・クリ・くるみ・どんぐり・もも・きのこ・ごまなどがあり、それらはそのうち栽培されるようになり、後には稲作も行われるようになった。彼らは火を使い、焼く・煮る・ふかす・煎るなど料理法は実に多彩であった。

<衣>サルマタ・ハカマを身につけ身体を腕輪や指輪などで飾り、顔や体には丹・朱を塗って化粧をした。男子は角髪とよばれる髪型を結っていて、これは日本の埴輪にも多く見られ、「記紀」や「魏志倭人伝」にも出てくる。

<住>ドラヴィダ民族は最初、山腹や崖に自然にできた洞窟や横穴に入って雨露をしのいでいたが、そのうち道具を使って自分の好きなところに住むようになった。やがて、登呂遺跡に見られるような竪穴式住居も現れる。

●宗教に関して……

ドラヴィダ民族にも、日本民族と同じように祖先崇拝があり、歴史上・伝説上の英雄の崇拝も行われる。また、泉・ヘビ・カラス・牛などが神聖視され、クワなどの道具類の崇拝もある。そして人々は鬼神や怨霊が人に危害を加えたり、のり移ったりするのをおそれて、これらを祭る。鬼神は巨木や岩などに宿ると考えられ、これを静めるために動物の犠牲や儀礼的な狩猟を行った。

———このように様々な日常の行為において、日本民族とドラヴィダ民族は共通な点がみられるのである。

(4) 日本語とドラヴィダ語の比較 —— 日本語とドラヴィダ語の共通構造

1. 母音は a・i・u・e・o の 5 つである。
2. エ(e)の音が共通して不安定である。
3. 二重母音は本来的には存在しない。
4. 基本的に単語は母音で終わる。
5. 語頭には流頭・濁音・子音群がない。
6. 後置詞(助詞)が用いられる。
7. 疑問文は平叙文に疑問助詞・接頭語をつける。

(英語では疑問文にするのに主語と動詞をいれかえたり助動詞を用いたりするが、ドラヴィダ語は日本語と同じように、疑問を表す疑問詞や接尾語を用いる)

例

Nin idin bāchkāi-kā?
おまえは これを 言った か

また、作り方だけではなく、疑問詞自身も一致する。たとえば、日本語の「……か?」や、「……や?」はドラヴィダ語のクルク語の「-kā」マール語の「-y-ān」に対応する。

8. 指示代名詞に近・中・遠の3種類があり、三人称代名詞に流用される。

(英語には"これ"にあたる this と"あれ"にあたる that しかないが、ドラヴィダ語には、日本語と同じように"これ" "それ" "あれ" にあたる i, u, a がある。)

9. 所有関係は、「……は ~ が有る」と表現する。

ドラヴィダ語では所有を表すのに「…が ~ を持つ」と言わずに「……に(は) ~ がある」と表現する。これは日本語の構文と同じである。

10. 敬語法が発達している。

・例・タミル語の敬語法……複数形を単数として用いて敬意を表現する

単 数	複 数	敬語法(単数)
av-an (彼) av-a-l (彼女)	→ { av-ar <彼(女)ら> av-ar-kal <〃>	→ { av-ar <彼(女)> av-ar-kal

・例・テルグ語の待偶表現

- ① vādu <彼(あいつ)> 年下の身内・竹馬の友 ← 敬意なし
- ② atanu <彼(あの人)> 成人した身内・親友 ← 少し敬意あり
- ③ āyana <彼(あの方)> ← 完全な敬意あり
- ④ vāru <彼(あのお方)> 重要人物をさし、その人の ← 最高の敬意
いる時に使用する。

※ この様に優れた敬語法が発達している。

11. 語順は、主語・目的語・動詞であり、修飾語は被修飾語の前にくる。

日本語	: 良い	たき木を	さがす	ために	丘に	登って	いる
クイ語 (ドラヴィダ諸語)	: negi	vaska	dah-pa	tangi	sōru-tini	namb-ai	man-n-eru
英語	: good	firewood	seek-for	to	hill on	climbing	are

※ このようにドラヴィダ諸語の単語を訳して、その日本語をそのまま語順をかえずに並べただけで、日本語の文ができる。

(5) 結論 ——ドラヴィダ語がどのようにして日本へきたか

ドラヴィダ語が日本語と瓜ふたつの言語であることは、これまでの(1)~(4)の項目により明らかになったことと思う。おそらくこの地球上でドラヴィダ語ほど、日本語に似た言語は、ほかに見出すことはできないであろう。それでは、日本語はいつ、どこから、どのようにして日本へ来たのであろうか。

どこの民族が日本へ言葉を伝えたかを知るひとつの方法として、稲作を伝えたのがどの民族であったかを調べる方法がある。日本に稲作を伝えたのは中国や朝鮮だと言われているが、その前はどこから中国へきたのだろうか。ところでドラヴィダ語には非常に多くの稲作語彙の対応が見られる。このような言語は他にはない。

日本語は系統的に中部・北部ドラヴィダ語に近い言語である。このことは日本祖語が南部インドへ進んだのではなく西北部から東北部へ進んだことを示している。インド東北部に移った原日本民族はしばらくそこで稲作をして定住したあと、紀元前1500年頃、西北インドに侵入したアーリア人のために引きおこされた北部原住民の民族移動のために原日本民族はさらに東部へ押し出され、中国の雲南地方へ移ったと思われる。そして雲南地方へ入った原日本語と稲作は中国南部や江南地方へと進み、そこから対馬海流によって北九州に到来したと考えられるのである。

IV 感想

私達2人の研究はお互いの領域を定め、その上での共同研究であったため、心配していた研究方法についての問題点は克服することができたと言えるであろう。しかし、選んだテーマが専門家の世界でもまだ明らかになっていないものであるため、参考文献がそれぞれ全く異なる仮説をたてていてとても私達には判断しかねた場面もあった。その中で最も私達にも理解しやすく、興味のあるドラヴィダ語について調べたこの研究は、大変楽しく実りの多いものであったと思う。

V 参考文献 ——「日本語の成立」「日本語はどこからきたか」「日本語の源流」その他